
魔法少女リリカルなのはStriker'S ～理想を目指す魔術師～

耶月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStriker's ～理想を目指す魔術師～

【Nコード】

N6011J

【作者名】

耶月

【あらすじ】

理想を目指して戦いに身を置く衛宮士郎。封印指定に指定され自分を狙う魔術師を退けると、大師父からの頼みを聞いた遠坂凜に並行世界へと飛ばされる。そこで彼は白い魔導師と出会う。

この作品は二次創作クロスものです。それが駄目な人はお帰りを。

プロローグ（前書き）

この作品は二次創作クロスものです。それがダメな人はお帰りを。更新も不定期で作者に文才が皆無なため駄文です。

またクロスものでオリ設定、原作設定独自解釈などが多々あります。

それでもいい人はどうぞ。

ブローグ

「 体は 剣で 出来ている
I am the bone of my sword
」

血潮は鉄で 心は硝子
「 Steel is my body, and fire
is my blood
」

幾たびの戦場を越えて不敗
「 I have created over a thousand
blades.
」

ただ一度の敗走もなく、
Unaware of loss.

ただ一度の勝利もなし
「 Nor aware of gain
」

担い手はここに独り。
「 With stood pain to create
weapons.
」

剣の丘で鉄を鍛つ
waiting for one's arriva
「
」

ならば、 我が生涯に 意味は不要^で

「 I have no regrets . This is
the only path 」

この体は、 無限の剣で出来ていた

「 My whole life was “ unlimi
ted blade works ” 」

第一話

｝ shiro side ｝

今俺は死を覚悟している。

辺りは崩壊し炎に包まれた街であつたものと俺が殺した魔術師たちの死体。そして目の前にはかつての魔術の師であり共に戦つた遠坂凜。

「なんでさ」

この状況に思わず悪態をついた。

自分の力が封印指定になつてからも”正義の味方”をし続けアイツのこともあり死は覚悟はしていた。

もっともそう易々と死ぬ気はなかったが。

俺は遠坂に何のためにここにいいのか聞いた。

「どういづつもりで君は此処にいるんだ遠坂」

俺の問いに遠坂は一度目を閉じてから答えた。

「ちよつと大師父に頼まれたことを済ませるためにね」

その答えに俺は眉をひそめた。

「大師父からの頼みごと」だと・・・一体なんだ？

恐らく俺に関係することなのだろう。そうでなければ俺に関わる必要はない。

可能性としては俺を殺しに来たと可能性が高いが。

「その頼みごとは俺を殺すことか？」

取り合えず俺を殺すことなのか聞いてみると彼女は溜息をついた。

「違うわ。私が大師父から頼まれたのは衛宮士郎を並行世界へ飛ばせてこと」

「俺を並行世界へ飛ばす・・・？」

なにを考えているんだあの人は。

「私に頼んできたのはただの気まぐれみたいよ」

頼むから人の考えを先読みしないでくれ。

俺も思わず溜息をついた。

俺の様子を見ていた遠坂は話し出した。

「私だって大師父から頼まれない限りアナタが殺されることに関して何もしようと思わなかったわ。アナタから覚悟も聞いていたし理解もしていたからね」

「わかった把握したよ」

理由も分かり納得したところで疑問が浮かんた。遠坂は第二魔法を使えないのにどう俺を飛ばすんだ。

「遠坂。キミは第二魔法を使えるのか？俺の記憶じゃ使えないはずだが・・・」

「そうね。確かに私は第二魔法にはまだ至ってないわ」

「ならどうやって・・・」

「これを使うわ」

そういつて彼女が懷から取り出したのは何時だったか俺が投影した宝石剣ゼルレッチ。

「これを使えば私でも並行世界へ孔を空けることはできるわ。もっとも、どついう並行世界へ通じる孔が空くか分からないけどね」

その孔から俺が飛ぶってことか。
まあいいだろう。もうこの世界に俺の居場所はないのだから他の
世界に求めるのも手だ。

「そうか。なら飛ばしてくれ」

「あら、早い決断ね」

「まあな。もうこの世界に俺の居場所はないんだ。それに気付いてはいたさ。決して正義の味方にはなれないってことも。それでも目指すことはやめない」

理由を聞いた遠坂は呆れたように溜息をついた。

「全く。結局、分かっているけどソレを目指すのね。少しは自分の幸せってものを考えなさい」

「それが衛宮士郎という人間なんだ仕方が無いだろ」

今更この衛宮士郎の根本を変えることはできない。

それは遠坂も理解しているもので俺の返答を予測していたのだから苦笑していた。

「なら一つ魔術の師として言わさせてもらおうわ」

「なんだよ今更・・・」

「いいから聞く!」

俺の言葉を遮った遠坂は一旦間を置いてから話だした。

「正義の味方を目指すなら先ずは身近なところから正義の味方になりなさい。そして今までのように他人を優先せずに出来るだけ自分を優先していくこと。これが師から弟子への最後の教えよ」

全く何を言うと思えばそういうことか。

今の俺にはその先に何があるか分からない。

「ありがとう遠坂。肝に銘じておくよ。今は分からないけど何時か俺が分かる時が来るのだろう」

そう言いながら俺は笑顔を向けた。

遠坂も微笑みながら返した。

「本当にそうなればいいのだけどね」

「そうだといいいけどな」

「俺が並行世界に飛んだら一つ頼めるか？」

「いいわよ」

「この近くに死徒がいる。俺はソレを始末しに来たけど飛んだら出来ないから代わりに始末しておいて欲しい」

「そういうこと。いいわ始末しておいて上げるわ」

「たのむ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

暫らく沈黙が続く中俺が話を切り出す。

「そろそろ飛ばしてくれ」

「分かったわ」

遠坂が宝石剣を構え術式を口にする。

「Zweihaender・・・」

その術式と共に僅かに宝石剣の指す景色が歪む。

そして僅かな孔が空き時間と共に広がる。

その孔から覗かせるものは並行世界へと繋がる漆黒の空間。

「いけるわ衛宮君」

「ああ元気でな遠坂。皆にもよろしくな」

異世界へと繋がる孔へ向かいながら遠坂に別れを告げる。

「ええアナタも元気でね」

孔を維持する遠坂も返してくれる。
ソレを聞いて俺は異世界への孔へ飛び込んだ。

｝ side out ｝

｝ nanoha side ｝

起動六課が稼動して初めて緊急出動した私たち。

全ガジェット・ドローンを撃破し、レリックを確保した後、スバルとティアナ、私の三人でレリックの護送をしていた中、緊急通信が入った。

『ロングアーチからスターズ01へ。なのはさん緊急事態です！』

「こちらスターズ01。どうしたのシャーリー」

『今なのはさん達がいる近くで空間湾曲を確認しました。同時に魔力反応を感知』

「空間湾曲と魔力反応？シャーリー次元振は確認できた？」

空間湾曲と魔力反応だとすると次元干渉か次元災害ぐらいしかないけど。

そう思っているとシャーリーから返答があった。

『いいえ。次元震は小規模なものさえ起きていないです』

「なら次元干渉だね」

『恐らくそうだと思います』

シャーリーと状況を確認しているとグリフィス君が回線に入ってきた。

『なのはさん今から現場に向かうことはできますか？ライトニングのほうはまだ事後処理が終わってなく距離があるのでお願いしたいのですが』

「うん構わないよ」

グリフィス君からの話を私は承諾した。

『ありがとうございます。ではスターズ01は空間湾曲が確認された現場へ。スターズ03、04の両名はそのままレリックの護送を』

「了解！」「」

それから私はレイジングハートに送られてきた座標を元に現場へと飛んでいった。

現場付近は木々に覆われた森で空からでは地上の様子が分からなかった。なので私は森の中に降りていった。

森の中は生い茂る木々によって少し暗くなっていて、その中を飛びながら移動していた。

取り合えず私は現場付近に到着したことを報告するためロングア

イチへ回線を繋げた。

「スターズ01からロングアーチへ。空間湾曲と魔力反応があった現場付近に到着。これより付近の探索に入ります」

『こちらロングアーチ。了解』

ロングアーチとの通信を切って、サーチャーを飛ばし付近を歩きながら搜索を始めた。

「うーん・・・辺りには異常は感じられないけどな・・・レイジングハート何か分かる？」

辺りを歩きまわっても異常は見受けられない。

「There is not the abnormality around (周りに異常はありません)」

「そう・・・取り合えずもう少し搜索してみよう」

それから暫らく辺りの搜索を続けたが異常は見つけられなかった。

「こちらスターズ01。ロングアーチへ現場周辺を搜索してみましたが異常は見受けられませんでした」

そのことを報告するためロングアーチで通信を入れると応答したのはグリフィス君だった。

『こちらロングアーチ。了解。そうですか異常はありませんでしたか』

「うん、サーチャーも飛ばして結構な範囲を搜索しては見ただけ以上らしい異常は確認できなかったよ」

『わかりました。では迎えのヘリが来るまで待機してて・・・』

「そこから急いで離れる！！！」

グリフィス君の声を遮るように遠く後ろから男性の声が聞こえた。同時にレイジングハートが声を上げた。

「Master, it is a back! (マスター、後ろです!)」

ふたつの声を聞いた私は咄嗟に右へ回避行動を取った。体勢を立て直し自分がいたところを見た。

「・・・な、なに・・・あれは？」

私が見たものは明らかに異常だった。魔導師になってから十年経つがこれほどまでに見たものを「本当

に人なのか？」という疑問を感じたのは始めてだった。
茂みの影から乗り出す生気の感じられ無い男性の上半身、そして
右腕であるであろう右肩から伸びた影。

『なのはさん！大丈夫ですか！？』

グリフィス君からの呼びかけに私は出来るだけ答えた。

「うん大丈夫。応援をお願い。出来るだけ急いで」

そう伝え戦闘に集中するため通信を切る。
すると目の前の男性は影から出てきて話しかけてきた。

「突然ですまないがお前を殺させてもらおう。何せ先ほどの術の
せいか酷く消耗してしまつてね。それ故、空腹で堪らないのだ！！
！！」

「・・・っ！！」

「Protection」

男性が言い切った瞬間、男性の足元から影は私に向かって鋭く伸
びてくる。

反応できなかったそれをレイジングハートの自動防御が防ぐ。
自分の攻撃が防がれた男性は顔に手を当てながら話す。

「ふむ、見たことの無い術だがお前の仲間が来る可能性がある今は気にしないでおう」

その言葉と共に先ほどと同じように影が伸びるが今度は違い、無数の影が私に向かってきた。

「レイジングハート!!」

「Circle Protection」

今度は反応できサークルプロテクションで全ての影を防ぎきる。

「Barrier Burst」

それをバリアバーストで弾き、自分が得意とする遠距離からの攻撃をしようと距離を取ろうとするが不意に感じた悪寒で背後にプロテクションを張る。

その直後、背後の木から伸びてきた影の攻撃を受けプロテクションから衝撃が伝わる。

「遠距離から攻撃を仕掛けたいようだが生憎そんなつもりは無いぞ」

男性はそう言いながら殺気の籠った眼で此方を見てくる。

私は不味いと思った。

相手が使う力は底が知れないし距離が関係なく何処からでも攻撃できるし、まだ分からない力があるかもしれない。

こっちは攻撃しようにも距離が取れないためディバインシユーターしかこのレンジで使える攻撃魔法がない。

状況からすれば私が不利で、それに違いない。

突然、男性が口を開いた。

「そろそろ終わりにさせて貰おう！」

そう言うつと右腕を突き出した。

突き出すと共に右腕から膨大な影が私へと伸びて来た。それを見て私は防御しようとする。

「Protection EX」

「・・・っ！」

膨大な影をプロテクションEXで受け止めるが、受け止めきれず受け止めたまま後ろの木へ叩きつけられる。

プロテクションEXの範囲から溢れた影は私をプロテクションEXごと動きを封じ込める。

「大した防御力だ」

男性はそう言って左腕を振り上げた。

「
カランド、ボルクエー
“偽・螺旋剣”！！！！」

男性が左腕を振り上げると共に別の男性の声が響く。

その声から聞こえてから刹那、左腕を振り上げていた男性空を切り裂いた閃光よって上半身から上が影と共に血飛沫さえ出さずに消し飛んだ。

「えっ・・・？」

突然のことに私は呆気に取られた。

いきなり対峙していた相手が閃光と共に消えてしまい何が起こったのか理解できなかった。

上半身が消し飛び下半身だけになったモノは灰になるように消えていった。

状況が未だに飲み込めず混乱する私に男性の声が聞こえた。

「大丈夫か？」

声が出た方へ振り返ればそこには黒弓を持ち赤味かった銀髪にやや褐色肌をした青年が佇んでいた。

これが私、高町なのはと衛宮士郎の出会いだった

｝ side out ｝

｝ rin side ｝

「行つた・・・わね」

衛宮君が並行世界へ旅立つたことを確認した私は孔を閉じようとした。

だけどココでやってしまった。

「・・・っ!？」

私の悪い癖である「ついウツカリ」が出てしまった。
ソレにより孔を広げていた術式が暴走を起こし一時的に孔が歪んで拡大した。

「くっ!？」

何とか暴走した術式を制御しようとするが孔は広がり続ける。
広がる孔が瓦礫を飲み込もうとしたとき近くの影から何かが飛び
出てくる。

その何かを見た私は驚いた。

「死徒っ!？」

その何かは明らかに人でない雰囲気をだす死徒。
影から飛び出てきた死徒は近くにいた私に気付き此方を向く。

「お前か魔術師。コレをやったのは？」

死徒は開いている孔を見ながらそう私に問いかけてきた。

「何者かが私の領域へ私を滅しに来たのかと危うくコレに巻き込
まれる所だったわ」

コイツが衛宮君が言っていた死徒ね。

普段なら容易く相手に出来るけど今は不味い。

暴走しているコレを抑えている現状じゃ相手に出来ない。

「まあいい。お前も私を見たのだ。当然、私を滅するつもりなのだろう」

「ええ、そうだけど生憎今は手が離せないから後で相手にして貰えないかしら？」

「その術の維持か・・・」

提案はしたけど恐らく無駄ね。

まあそれでもいざとなれば最後の手段を使わしてもらいますか。そう考えているうちに死徒は殺気を帯びる。

「ふむ、出来れば後で相手するのもよかったがそうなつては私が不利だろう。ならばお前がその術を維持してる間にお前を殺させてもらおう」

そういつて死徒は影に溶ける。

この死徒は影を操る力を持っているみたいね。人間だったときは魔術師だったのかしら。

私はそう判断して警戒する。

こうなつては最後の手段を使うしかない。

それを行えば衛宮君に迷惑が掛かるけど仕方が無い。そう考えた私の背後の影から死徒が現れる。

「もらつた！！」

現れた死徒は腕から伸ばした影で貫こうとする。

それを私は術の制御も放棄して回避する。
私の行動に驚いた死徒は一瞬動きが止まる。

「何！？」

その一瞬が死徒の終わりだった。
制御を失った術は暴走し孔をさらに歪める。
死徒はその歪みに巻き込まれる。

「何なのだ！これは！？」

歪みに巻き込まれた死徒は孔へと飲み込まれていく。
抗おうとするがアレからは抜け出すことは無理だろう。
死徒が孔から抜け出すのが不可能だと分かった時点で私は再度、
術の制御を行う。

一度、制御を放棄したとはいえただ抑えていただけだ。
今度は無理矢理閉じるために行く。

既に死徒は飲み込まれ並行世界に飛ばされた。
その後、並行世界へ繋がる孔を何とか閉じた。
あの死徒は衛宮君と同じ世界に飛ばされるだろう。
ということは結局、彼が死徒を滅することになるだろう。

「……………ごめんなさいね衛宮君」

こうなつてはどうすることも出来ない。
ただ、今はこの世界からいなくなった弟子に対して謝るしかなかった。

{ side out }

第一話（後書き）

耶月「始めまして、作者の耶月です。あとがきということでもあ何を書こうか悩んだんですけど思いつかなかったけどどうするよ主人公の士郎よ？」

士郎「いやそこで俺に聞くなよ」

なのは「仕方ないよ士郎君。作者がこんなのは今に始まったことじゃないんだよ」

士郎「・・・そうだったな」

耶月「なんか当たり前のことだと言われてる気がするけど否定できない自分が悔しい・・・」

士郎「でどうすんだ作者？」

耶月「とりあえずリリカルなのはとFateの間で関連してくる設定に関して解説したり、本編のことを話したり、裏話を話したりしようと思うけど二人はどうだ？」

士郎「俺はいいぞ」

なのは「私も構わないよ」

耶月「それじゃ最初にこの話書いて俺が思ったことなんだが・・・」

なのは「どうしたの？」

耶月「自分の書いた文が駄文過ぎて泣けてくる・・・」

士郎「それは分かって書いてんだから諦めろ」

耶月「それは分かっているがどうしてもな・・・」

なのは「まあそこは今後直していけばいいと思うよ」

士郎「そうだぞ作者」

耶月「そうだな今後頑張っていくか」

士郎「話に区切りがついた所で聞きたいことがあるんだがいいか？」

耶月「いいぞ士郎。何が聞きたい？」

士郎「魔力とかその辺りの設定はどうしたんだ？」

なのは「確かにそれは私も気になるね」

耶月「ああその辺に関しては少し悩んだな。リリカルなのはじゃあ魔力は外部から取り入れるしかないけどFateだと自分でも生成することが出来るってなっていたからな」

なのは「魔術と魔法の設定も全然違うしね」

耶月「そうなんだよなそれにそれぞれリンカーコアと魔術回路って設定があるからなうまく都合つけるの苦労したよ」

士郎「大変だったんだな。それでどういう風に解釈したんだ？」

耶月「まずリンカーコアは体外から魔力を取り込む、魔力を貯める、必要な時に放出する、貯められる魔力は大きさによるって設定だ」

なのは「うん」

耶月「そして魔術回路は生命力を魔力に変換する、世界の法則に魔力を流すパイプライン、体外から魔力を魔術回路で変換して取り込むと痛みが走るって設定だ」

士郎「そうだな」

耶月「双方の設定を比べると以外とお互いに同じ役割をしている設定がないんだ」

士郎「たとえば？」

耶月「リンカーコアには魔力を貯めるというタンクの設定があるけど魔術回路にはそういう設定はない。ただ体内に魔力が存在するだけ設定にあるんだ」

なのは「なるほど」

耶月「そこでだ。お互いにない役割の設定をそれぞれ補おうって思っていたんだ」

士郎「確かにそれなら都合がつけやすいな」

なのは「それで結果どうなったの？」

耶月「こうなった」

魔力、魔法、魔術関連の設定

空間や世界にあり魔術師と魔導師は体内に有している。

また魔術師と魔導師はともにリンカーコア、魔術回路を持っているがリリカルなのはとFateの世界では違いがでてくる。

その違いとしてはこうなる。

魔術師と魔導師では魔力の有し方は共にリンカーコアに貯めているのだが、Fateではリンカーコアは存在するが確認されていないリリカルなのはでは魔術回路を持っている人は魔導師以外にもいるが魔法の行使のプロセスがFateの魔術とは違うため開いてはいないし確認もされていない。

理由として魔術回路のパイプラインの役割は魔法には要らない、生命力を変換し魔力を生成する役割もリンカーコアで体外から取り込むことが出来るからの二つ。

同じようにFateでのリンカーコアも魔術回路が魔術を行使する上で必要なためリンカーコアの魔力を貯める、魔力を放出する役割はあるが体外から魔力を取り込むという機能は衰退してなくなっている。

上記をまとめると、

魔導師：リンカーコアさえあれば魔法を行使できるため魔術回路開いていない。

あとは原作の設定のまま。

魔術師：魔術回路は開いていてリンカーコアも体外から魔力を取り込む機能以外は

機能している。

魔術回路が生命力を変換して魔力を生成

生成された魔力はリンカーコアに貯められる

魔術を行使するときはリンカーコアが魔力を放出

放出された魔力は魔術回路を通り世界の法則に基づいて作用

魔力的神秘が発現

となる。

士郎「よく考えたな・・・」

なのは「魔道師は魔術回路が実際は開いてないだけであるってだけで変わりはないんだね」

耶月「その分魔術師に設定を付け加えたな」

士郎「だがそれで原作には無かった設定の部分をリンカーコアの設定が補っているな」

耶月「これで設定を納得してもらえなかったら泣けるよ？てか泣く」

士郎「これだけやっておけば大丈夫だろう」

なのは「そうだよ。皆納得してくれるよ」

耶月「そうだといいがな。まあ結局は読者が判断することだからな

んとも言えん」

士郎「そういうことだ」

耶月「それじゃあ今回はこれで終わるぞ」

なのは「わかったよ」

士郎「ああわかった」

耶月「それじゃあ更新は不定期になりますができるだけ頑張ります」

なのは「またこの作品を読んで感想や質問、アドバイスがあればどんどん書いてください」

士郎「それを見たら作者もやる気がでるので頼むな」

耶月「では『魔法少女リリカルなのはStriker's』理想を目指す魔術師」次回をお楽しみに」

第二話

） sh i r o s i d e ）

「大丈夫か？」

死徒を倒して襲われていた少女に声をかける。
ただし口調は地を出さないようアイツでだ。
声をかけられた少女は振り返った。

「は、はい。大丈夫です」

そう返す少女は俺から見ても言葉通りに外傷ないようで大丈夫だろう。

「それならよかった。アレは危険なのでな」

そう言いながら俺は改めて彼女の容姿を見たが、少し過去のトラウマが思い浮かべれた。

体つき顔つきは街で男10人に聞けば10人が綺麗だというぐらいで美女と言っても問題なかった。
だが纏っている衣服が問題だった。

白を基調とした服で胸元の赤いリボンが印象的なのだが、どうみてもコスプレの衣装にしか見えなかった。

更に手にしている杖のような物も合わさって魔法少女というイメージが沸き一瞬赤い魔法少女を思い浮かべてしまった。

「あの〜どうしましたか？」

「いや、ちよつと過去にあったことを思い浮かんでいたただけだ」

トラウマを思い浮かべていた俺の態度がおかしかったのだろう、彼女が怪訝な表情で聞いてきた。

そう返すと彼女はクエスチョンマークを頭に浮かべてがあまり気にせず話しかけてきた。

「私は時空管理局古代遺物管理部機動六課所属の高町なのといいます。先ほどは助けて頂いてありがとうございます」

彼女が自己紹介をしたので此方も自己紹介で返した。

「私は何処にも属してはいないが衛宮士郎という者だ。それでさっきのことだが私がしたいようにしたのだから礼をいう必要はないさ」
「それでもお礼を言わさせていただきます。正直、どう相手すればいいのかわからなかったので・・・」

ソレはさっきほどの戦闘を見て分かった。

彼女は死徒を相手にしたことはない。

まあそれは終わったことだし彼女も無事だからどうでもいい、今はこれからのことだ。

とりあえず高町は時空管理局という組織に属しているみたいだが、なにせ俺はこの世界のことは知らない。

その時空管理局というものがどういう組織なのか分からない。

なので彼女と話してそこから把握していこうと思ったが、先に高町が聞いてきた。

「衛宮さん、ところでどうしてこんなところにいるんですか？ここは人がいるような場所じゃないんで」

「それなんだが・・・」

まいった。

何故ここにいるか説明しようにも、並行世界から飛んできたなんていえないしな。

「なんとはいえいいのか・・・説明が出来ない」

「えっ!？」

俺が説明できないと言うと彼女は目を点にしていた。

そのあと彼女は少し考えていたようだがすぐに俺に話しかけてきた。

「衛宮さん、もしかしてここを地球だと思っています?」

「ああそのつもりなのだが」

一体どうして当たり前のことを聞くんだ高町は。

俺がそう思っていると彼女は真剣な表情で話し出した。

「衛宮さん、ここは地球じゃないです。この世界はミッドチルダという世界です。そして衛宮さんは地球から飛ばされた次元漂流者だと思います」

「・・・はあ？」

高町の言葉を聞いて気が遠のきそうになった。

ここが地球ではなく異世界なのか。

ということとは第二魔法で並行世界へ飛ぶどころか異世界にまで飛んだのか。

そう考えれば高町が所属している時空管理局もどういうものなのか分かった。

おそらく地球やミッドチルダ以外にも複数の異世界があるのだろう。

その複数の世界を管理しているのが時空管理局ということか。

「なんとなくだが状況が把握できた、複数の世界があつてそれらを管理するのが高町がいる時空管理局で、俺は次元漂流者といわれる世界間での迷子なのだな」

俺がそう把握したことを間接に答えると高町は意外そうな顔をしていた。

「そういうことですけど、冷静ですな衛宮さん・・・」
「まあな。今までも異常なことばかりで大概のことにも驚かないさ」

そうは言つが実際は気が遠のきかけていたけどな。
とりあえず俺の処遇を聞こう。

「とりあえず私はこれからどうなるのかね？」
「衛宮さんは私が次元漂流者として保護することになりますけど・・・」

やはりそうなるか。
保護されるとなるといろいろ聞かれるのだろうけど、この際話しておくか。

「分かった、私を保護してもらおう。あと保護されるにあたって聞いておきたいこと話しておきたいこともあるがいいか？」
「わかりました。こちらでも聞きたいことがあるので、一旦、私が所属している機動六課でお話をするでいいですか？」
「ああ構わない」
「では少しまってもらっていいですか？迎えを呼ぶので」

高町はそういつと手元になにかの画面のようなものを出した。

「こちらスターズ01、高町なのは。ロングアーチ応答ねがいます」

そう高町がいうと画面に人が映し出された。

『こちらロングアーチ！大丈夫なんなのはちゃん！！』

映し出されたのは栗毛でショートカットの少女で高町のことを心配していたのだろう。

応答してすぐに高町の安否を聞いていた。
それに高町も若干呆れていた。

｝ side out ｝

｝ nanoha side ｝

「にやははは、落ち着いてはやってちゃん。私は衛宮さんに助けられて大丈夫だから」

そういいながら私ははやてちゃんを落ち着かせる。

様子を見る限りちよつと心配しすぎてる気がしなくも無いけど、過去に撃墜された前歴があるからあまり心配しないとはいえないなあ。

そう考えていると落ち着きを取り戻したはやてちゃんが話をする。

『それならよかったわ。いきなりなのはちゃんが襲われてそのまま通信きつたから心配したんやで』

「心配かけてごめんね」

『いや、なのはちゃんが無事ならそれでええんや。あと衛宮さんって誰なん？』

はやてちゃんが衛宮さんのことを聞いて、私はまだ衛宮さんのことと説明してなかった事に気が付く。

そのことに気が付いた私は衛宮さんが次元漂流者であることをはやてちゃんに説明する。

「ええとね、衛宮士郎っていう男の人で私達と同じ世界の人。何かの拍子にミッドに飛ばされた次元漂流者だと思うから私が保護したんだよ」

『なるほどな、わかった。ほな、その人をうちで保護するってこと

やね』

衛宮さんを保護することを伝えるとはやてちゃんは快諾してくれた。

「うん。それで迎えに来てほしいんだけど・・・」

『それなら、ヴァイス君がヘリでフェイトちゃんとシグナムを乗せて向かっとなるから大丈夫やで』

「そうなんだ。じゃあ衛宮さんと一緒に合流するね」

『了解や』

はやてちゃんと通信を終えインターフェイスを閉じると衛宮さんが呆然とその場に立ち尽くしていた。

「衛宮さんどうかしたんですか？」

私がどうかしたのかと聞くと彼は我に振り返えた。

「ああ、こちらの世界の通信技術はとても進んでいるということに驚いてね思わず我を忘れてしまったよ」

そりゃあ地球にはこんな発達した技術もないし当然のごとく魔法技術もないから当たり前のこと。

だけど衛宮さんは砲撃魔法らしきものを使って助けてくれたから魔導師なのかもしれないけどどうなんだろう。

聞いてみようかな。

そう思い至り私は口を開いた。

「そうですか。でも衛宮さんは魔法みたいなものを使っていますよね？確か地球には魔法技術は存在してないはずですけど・・・」

「それなんだが、確かに魔法と云われるものはあるんだ」

「えっ？」

地球に魔法があるの。

でも私が魔法を使うようになってから魔法があるって聞いたこともないし、勿論使う前からは存在自体信じてなかった。

一応私はやてちゃんのような例外はいるけど、それでも衛宮さんが言っていることは信じがたい。

「まあその辺りのことはここで話すよりも機動六課というところで話そうと思っている」

それならその方がいいかも。

多分、はやてちゃんがその辺りのことも聞くだろうから今話してもらつと二度手間になっちゃう。

「それじゃあそのことも後で話すことで構いませんよ」

「ではそうさせて貰おう。あと、ちょうど迎えがきたようだ」

そう彼は言いながら空へと顔を向けた。
彼が向いてる方向を見ると空の遠くの方に微かにだけ何か此方に近づいているのが見えた。

その何かがヴァイス君が操るヘリだと気付いたのは私がヘリだと視認できる距離になってから。

でも衛宮さんは私が殆ど見えてない距離から見えていたんだよね。
この人どんな視力してるの。

そう思っているうちにヘリが到着して中から十年来の親友が姿を現した。

「なのは！大丈夫だった！？」

「大丈夫なのか高町？」

ヘリから現れたのはバリアジャケットを身に纏ったフェイトちゃんと同じくバリアジャケットを身に纏ってるシグナムさん。

フェイトちゃんはやっぱり心配しすぎてものすごい勢いで迫ってきてる。

逆にシグナムさんは落ち着いてるね。

「フェイトちゃんそんなに心配しなくても大丈夫だったよ」

「ならよかった」

フェイトちゃんが落ち着いたところでシグナムさんが衛宮さんの方を見た。

「高町が大丈夫なのはわかったがその男は誰なのだ？」

すると衛宮さんが話し始めた。

「私か？私は衛宮士郎という者だ。高町が迎えを呼ぶと言っていたことからして君たちは彼女の同僚か？」

衛宮さんの問いかけに二人も答えた。

「はい、私は時空管理局古代遺物管理部機動六課のフェイト・T・ハラウンです」

「同じく時空管理局古代遺物管理部機動六課のシグナムだ」

お互いに自己紹介が終わったところでフェイトちゃんとシグナムさんにこれまでの経緯を説明した。

「なるほど衛宮はたまたまこの場所にて高町がアンノウンに襲われているところを助けたということか」

「それで衛宮さん次元漂流者ということで保護するという方向に決まっただね？」

「そのことについてははやてちゃんから了承を得てるよ」

私のはやてちゃんから保護することに関して既に了承を得てるところを告げると二人は目配せして頷いた。

「そういうことなら私は問題ないよ」

「主ははやてが承諾しているなら私からいうこともない」

二人が承諾してくれたことに少し安心した私は衛宮さんの方へ体を向けた。

「それじゃ衛宮さん機動六課に向かいましょうか？」

「ああよろしく頼む」

それから私たちはへりに乗り機動六課へと向かった。

） side out ）

第二話（後書き）

耶月「どうも作者です」

士郎「どうもないだろう耶月いきなり更新が遅かったじゃないか」

耶月「そうだな先ず読者の皆様に謝ろう。更新が行き成り遅れてしまつてすみませんでした」

なのは「反省してるのは分かったけど、どうして更新が遅かったの？」

士郎「そういや俺もその理由は知らないな」

耶月「それはだな所詮言い訳にしかならなんだが3月に国家試験を受けるんでなその対策で学校に遅くまで残っているのと外せない私用が多かったのが原因だ」

士郎「それなら勉強しとけよ」

なのは「そうだよ勉強しとかないと大変だよ。フェイトちゃんも私のことがあつたけど執務官試験に二回落ちてるんだから」

耶月「いや執務官試験は俺の国家試験と比べるようなもんじゃないだろ。そっちのほうが難しいに決まつてる」

なのは「それでも勉強しとかないとダメだからね」

耶月「わかつてる」

士郎「話が纏まったところで耶月から話があるんだよね？」

なのは「えっ？そうなの？」

耶月「ああ士郎の投影及び剣製で登場させる宝具を読者から募集しようと思っただけ。一応、俺の中でも登場させようと考えている宝具はあるけど、所詮俺一人のアイデアじゃ詰まらないからなそれで募集しようってなったわけだ」

なのは「それじゃ士郎君が使える宝具が増えるってこと？」

耶月「そうだ」

士郎「それは有難いな」

耶月「とりあえず今俺が登場させるか考えている宝具だ。もちろん Fate 原作にないオリジナルもあるけどな。」

原作から

偽・螺旋剣（カラドボルグEE）

かんしょう ばくや

干将・莫耶

ロー・アイアス

熾天覆う七つの円環

フルンテイング

赤原猫犬

エクスカリバー

約束された勝利の剣

アヴァロン

全て遠き理想郷

カリバーン

勝利すべき黄金の剣

ルールブレイカー

破戒すべき全ての符

ナインライフズ・ブレードワークス
是・射殺す百頭
ゲイ・ジャルグ
破魔の紅薔薇

オリジナル

エッケザックス
不変不滅の剣

クラウ・ソラス
必然なる両断の刃

以上

士郎「オリジナルは二つか。効果はどういったものなんだ？」

耶月「効果は本編で使った時にでも説明するさ。もちろん使わなくても裏設定ということであとがきに載せるから問題ない」

なのは「でも名前で分かりそうだけどね」

耶月「俺にネーミングセンスがなかったからな。いい名前が思い浮かばなかったんだ」

士郎「とりあえずオリジナルで宝具を募集するとして読者達はどこに書き込めばいいんだ？」

耶月「それは感想のところに書いてくれればいいぞ」

士郎「なにしろ俺の投影できる宝具が増えてくれるのは助かるかな読者の皆よろしく頼むな」

耶月「それじゃ今回はここで終了だ。ちなみにオリジナル宝具は出来れば実際の神話とかで出てくる物の方が助かると募集期限は俺が終了というまでだからよろしく頼みます」

なのは「じゃあ『魔法少女リリカルなのはStriker's S』理想を目指す魔術師」次回をお楽しみにしてください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6011j/>

魔法少女リリカルなのはStriker'S ~ 理想を目指す魔術師 ~

2010年10月9日07時05分発行